回覧

春号

コミセン湘南 瓦版

令和４年３月１５日発行
湘南地区まちぢから協議会
コミセン部会
茅ヶ崎市中島１６７０
TEL０４６７(５７)５６５５

華の会　フラワーアレンジメント

今年正月、コミュニティセンター湘南１階ホールで人目を引いた謹賀新年のフラワーアレンジメント。２月中旬、この〝西洋風の生花〟創作サークル『華の会』の教室におじゃまると、そこにはもう春が！

春を呼ぶ服部さんの作品。右は青木先生。㊧カラーとじっくりお話し

春よ来い

枝を見て花と話す

コミセン湘南第２会議室に８種類の花材５人分が届いた。テーブルの上には各自持参の花器が並んでいる。彼女たちが最初に手に取ったのは枝もの。細い枝にたくさんの花を付けた啓翁（けいおう）桜、黄色の花びらのレンギョウをながめ黙想するようすを、華の会の指導者・青木初代さんが解説した。「まず作品のイメージをふくらませ、おおまかな形を決めます。枝ぶりを見て、花とお話をしながら、作業をすすめるのです」

フラワーアレンジメントで、日本の生け花の剣山に相当するのがオアシス。この吸水スポンジにバラ、香りが優しいストック、見た目も派手なアルストロメリアを挿していく。「春が来たって感じだわねえ」。同会代表の服部万里子さんの顔がほころんだ。

㊤枝ものを挿しながら形を決める
㊦花屋から届いた８種類の花材

西洋で生まれ育ち実用性が高いとも言われ、ふんだんに花を使い空間を埋めていく生け花。残っていたユキヤナギ、カラー、昆布のように大きなドラセナもそれぞれの場所に納まった。青木先生の「ここが少し寂しいかしら」などのアドバイスで修正、１時間半の創作が終了した。

心が和み生活に潤い

まったく同じ花材を使ったのに、形、高さ、色合いが違う自信作は、それぞれ持ち帰った。自宅の玄関、リビングに飾るのだそうだ。「今の時季だと１カ月は大丈夫。花を見ると心が和み、生活に潤いが出てきます」と服部さん。華の会のコミセン湘南での活動は一昨年 12 月からだが、月に１回の開催はもっと前から変わらない。ツキイチなら忙しすぎず、経済面での負担も軽いという。

２年以上続く新型コロナの感染拡大は第６波にも及んだ。さらに、ロシアのウクライナ侵攻。本物の春がやって来るのはいつだろう。

◆華（はな）の会　30 年前に湘南地区で青木先生、服部さんが中心になって立ち上げた。柳島小ＰＴＡの間でフラワーアレンジメントがブームになったことも。最初の２年間で十数個の基礎をマスター、自分で満足のいくアレンジができるようになるにはさらに数年かかる。今の華の会メンバーでキャリアの浅い人でも 15 年。華の会では現在、会員を募集していない。

★トピックスは裏面

コミセン湘南 トピックス

「湘南地区まちぢから協議会」ホームページからコミュニティセンター湘南の情報が見られます。「コミセン部会」から、もしくはQR コードを読み込みしてください。

帰ってきましたカンガルー

【令和3年 12 月 23 日　子育てサロン・カンガルー】コロナ禍のため令和２年１月以来休んでいたが、湘南地区の社協、推進協、民児協がスクラムを組んで再スタートした。８組の未就園児と保護者、計 11 人が参加。初めてのわくわくらんどで仲良く遊んでいると、ひと足早いサンタクロースが登場。クリスマスプレゼントをもらった子どもたちは大喜びだった。毎月１回、第４木曜日の午前 10 時からの子育てサロンでは、それぞれの季節に合わせたイベントを計画している。ただ、残念なことに１～３月の開催は新型コロナ第６波の影響で中止になった。

スマホ上達「まず触れ！」

【令和4年2月2日　初めてのかんたんスマホ講座】コミセン湘南で４回目。令和２年の最初の講座にも参加したという２人の男性は「あまり使わないうちに操作を忘れちゃったので、もう一度」。地図・カメラ・防災・ＬＩＮＥの取り扱い説明のほか、スマホに「キンカクジ」と吹き込むと京都・金閣寺の動画に切り替わる音声入力も体験した。１時間半の講座終了終、高齢の女性は「家で娘にスマホのことを聞くと面倒くさがられる。こんなに分かりやすく教えてもらえるとは…」と感謝。ソフトバンクのアドバイザーによると、上達のコツはたくさん触ることだそうだ。

どんぐり屋のひな祭り

【2月5日　永野コマ】コミセン湘南玄関を入ってすぐ右にある展示コーナーが新装。今回の永野良雄創作コマは黄色のぼんぼりの前に並ぶ、おびな・めびなの２組。その背後にはどんぐり屋金次郎が控え、「つぶ」という名の猫が両脇を固めている。この冬、コミセン湘南に飾られた永野さん作「あぶ凧」を当トピックス面で紹介。さらにタウンニュースが掲載すると大反響。コミセンに足を運んだ人もたくさんいた。〝湘南の匠〟の頭の中には次回作がグルグル回っているとか。さて、女の子の祭りに続く春の出し物は、男の子の〇〇。やっぱり目が離せない。

中島ヒストリーに迫る

【2月 23 日　地域の歴史を知ろう】「柳島・旧藤間住宅」以来のコミセン湘南主催シリーズ第２弾は「郷土中島の歴史をまなぶ」。第１回目（全３回）の会場には中島地区以外からの参加者もいて 30 人、講師は茅ヶ崎郷土会の平野文明会長。中島の地名が文献などに記されたのはいつごろか、相模川や道路の変遷を新旧の地図をスライドで見ながらたっぷり２時間学んだ。中島在住の羽切さんは「地元の人が地元の歴史を知ることは大切。こういう機会をもっと増やしてほしい」。この後２週にわたり、関東大震災での中島の変化、馬入の渡しなどの講義、日枝神社を中心した実地見学などが組まれた。

大正琴でラ・クンパルシータ

【2月 26 日　音羽会】平成 18 年、柳島の仲良しが「ボケ防止になにかやらない？」と始めたのが大正琴。月２回コミセン湘南に集まり、１時間半の稽古を続けてきた。大正時代に生まれた楽器は、左手でキーを押さえ右手のピックで弦を弾く。「音譜を見て指を動かし、周りの人と音を合わせる。脳トレですね」と東郷春海先生。レパトリーは「雪椿」「風雪ながれ旅」「星影のワルツ」「川の流れのように」など 24 曲。この日はタンゴのラ・クンパルシータも弾いた。音羽会代表の滝田さんは「新型コロナの影響で稽古の後の食事会、おしゃべりができなくなった分、難しい曲に挑戦しています」。

［あとがき］今回の「地域の歴史」シリーズの舞台・中島にはコミセン湘南も立っている。意外と知られていないのが中島から衆議院議員（２人）や茅ヶ崎市長を輩出していること。ここから大物政治家が生まれるのはなぜ？　ふと考えてしまった。